

# 平成22年度教育研究助成（個人研究）3年次研究報告書

愛知教育文化振興会

自信をもって主体的に行動し，文化の違いを尊重し，  
違いを生かして，協力し合おうとする子どもをめざして

～ 5年 合科的，関連的，継続的な体験学習による，多文化共生の学級づくり ～

研究領域（国際理解教育）



豊田市立西保見小学校

幸田 隆

自信をもって主体的に行動し、文化の違いを尊重し、  
違いを生かして、協力し合おうとする子どもをめざして

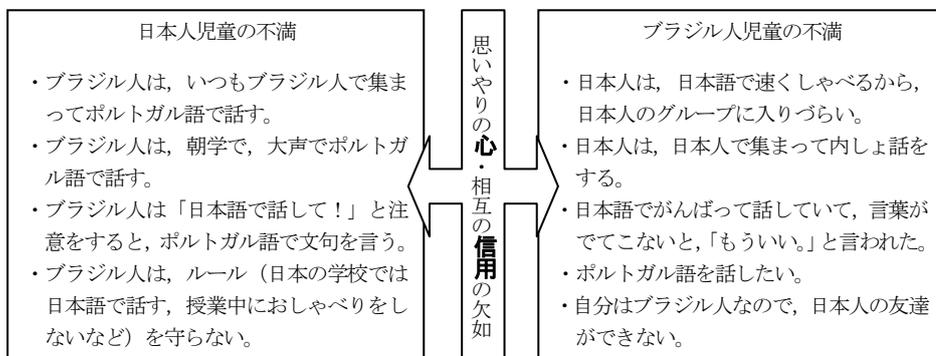
～ 5年 合科的, 関連的, 継続的な体験学習による, 多文化共生の学級作り ～

〈 目 次 〉

I	主題設定の理由.....	2
II	研究の構想.....	3
1	めざす子どもの姿.....	3
2	研究の仮説.....	3
3	多文化共生力.....	3
4	研究の手だて.....	4
5	抽出児童.....	6
6	指導計画.....	6
III	実践と考察.....	8
1	多文化共生体験の場の創出（手立て2）.....	8
(1)	文化の違いのよさを実感する体験.....	8
(2)	分かり合うよさを実感する体験.....	9
(3)	協力のよさを実感する体験.....	11
2	多文化共生体験の言語化（手立て3）.....	13
(1)	日記のテーマを工夫する.....	13
(2)	自主的な新聞作りを活性化する.....	14
3	多文化共生体験の価値付け（手立て4）.....	15
(1)	多文化共生力と関連させて学級に紹介する.....	15
(2)	教材化し、授業で活用する.....	17
(3)	人間の成長に関する哲学をぶつける.....	18
IV	まとめ.....	20
1	成果.....	20
(1)	自信をもって主体的に行動する.....	20
(2)	文化の違いを尊重する.....	20
(3)	文化の違いを生かして協力し合う.....	20
2	課題.....	20
V	実践を終えて.....	21
VI	参考文献.....	21

## I 主題設定の理由

本学級は、多文化共生について、体験を通して学ぶ上で、理想的な環境をもっている。学級の3分の1の児童は外国人児童である。23名中、外国人児童は8人。その内訳は、ペルー人児童が1名、7名のブラジル人児童となる。この中の3名の児童は、日常生活のコミュニケーションでは大きな問題は無いが、日本語で話し合いをしたり、読み書きをしたりすることが不自由である。そのため、国語と算数の授業の時、本校の日本語教室で取り出し指導を受けている。



資料1 日本人児童とブラジル人児童のお互いに対する不满

5月初め、毎日の日記の中で、日本人児童が、ブラジル人児童に対する不满を伝えてきた。「ブラジル人は、日本語で話すという学校のルールを破ってポルトガル語で話す。」「注意すると、ポルトガル語で文句を言う。」という不满だ。

そこで、お互いに対する不满（資料1）に耳を傾け、問題を解決するために、学級会を開いた。ブラジル人児童からは、「日本人は集まって日本語で速くしゃべるから入りづらい。」「日本語でがんばって話していたのに、言葉が出てこない、『もういい。』と言われた。」という声が聞かれた。「ポルトガル語を話したい。」泣きながら訴えるブラジル人児童もいた。相互の信頼の欠如がこうした言語の違いによる異文化間摩擦を引き起こしているように思われた。

学級会では、お互いに「仲良くしたい」という共通の思いが確認された。そして、級訓「パス・イ・コラサーン（平和と心）」で表現されているように、お互いにもっと「思いやりの心」をもって、行動する大切さが話し合われた。具体的には、ブラジル人児童は、将来日本で進学し就職をすることをふまえて、日本語力をつけるためにも、日本語を使うルールを守るということ。日本人児童は、ブラジル人児童の理解を確認しながら、ゆっくりと日本語を話すということに双方は同意した。

その後、お互いの不满は収まり、仲良く生活しているかのように思われた。しかし、6月初め、同じ問題に直面していることが、学級委員である日本人のA児の日記からわかった（資料2）。学級会という単発の活動だけでは、根本的な問題は解決できないのである。また、ポルトガル語と日本語という言語「文化の違い」がコミュニケーションを難しくし、多文化間で人間関係を深める壁となってしまっている。

そこで、今年度の研究実践は、「国際理解教育」という、より大きな枠組みの中で、能力の習得と定着だけでなく、人間的な成長をめざして、合科的、関連的、継続的に行うこととした。また、「文化の違い」という成長のための宝物を生かして、外国人児童だけでなく、日本人児童の多文化共生力を育てるという視点で、実践を積み重ねていきたい。以上のことから、研究課題を次のように定めた。

ぼくは学級委員として、はっきりと言います。朝学で、みんな自習をしているのに、ほとんどのブラジル人が大きな声でしゃべっていることです。ぼくたちが注意をすると、ぼくたちの知らないポルトガル語で文句を言ってきます。

ぼくたちは（日本人で集まって）放課を静かに過ごし、静かに話しているだけだけど、ブラジル人に内しよ話をしていられると思われていると思います。

そして今日、習字の時、Cさん、Jさん、Oさん（3人もブラジル人）がなんか、他の人をじゃまする話をしました。

先生、これはもう一度、学級会を開いたほうがいいですかね。もちろん、ブラジル人の気持ちは分かります。日本人がこわいから、先生に言えないという気持ちです。

資料2 A児（日本人）の日記 6/4

自信をもって主体的に行動し、文化の違いを尊重し、違いを生かして、協力し合おうとする子どもをめざして

～ 5年 合科的, 関連的, 継続的な体験学習による, 多文化共生の学級作り ～

## II 研究の構想

### 1 めざす子どもの姿

自信をもって主体的に行動し、文化の違いを尊重し、違いを生かして、協力し合おうとする子ども

### 2 研究の仮説

めざす子ども像の実現に向けて、次のような仮説を立てて取り組んだ。

仮説

合科的, 関連的, 継続的な体験学習を通して, 多文化共生体験の場を創出し, 体験を言語化して, 多文化共生力につなげながら, 体験を価値付けていけば, 多文化共生力が育つだろう。

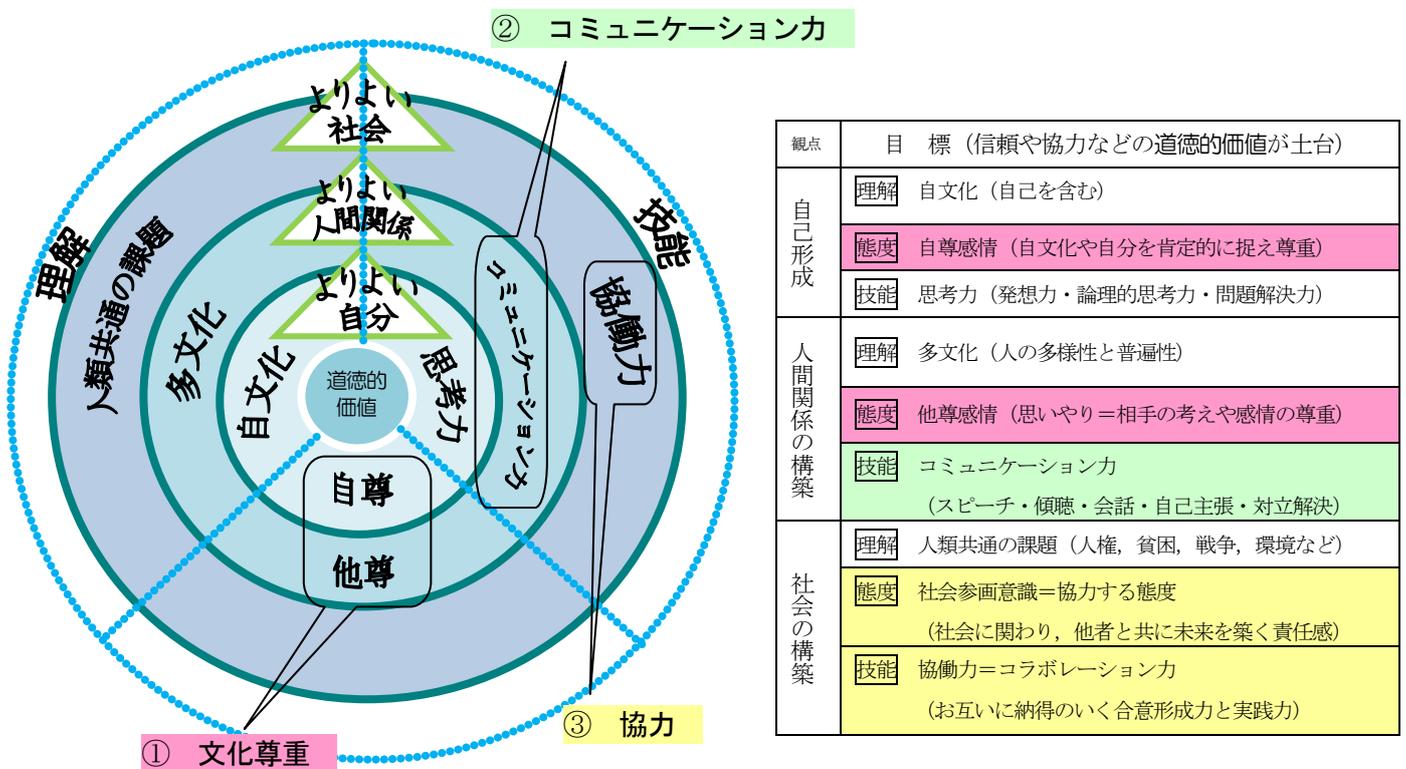
### 3 多文化共生力

多文化共生に必要な能力として, 国際理解教育の目標構造図 (資料3) を提示する。本実践では, 次の構造図の3観点に重点を置いたものを中心に論述する。

① 文化尊重 (自尊, 他尊) ② コミュニケーション力 ③ 協力 (社会参画意識, 協働力)

つまり, 多文化共生力とは, 自信をもって主体的に行動し (自尊), 文化の違いを尊重し (他尊・コミュニケーション力), 文化の違いを生かして, 協力し合おうとする力と考える。

国際理解教育の目標構造図 (資料3)



JICA 中部国際センター, 静岡市教育センター, 川崎市総合教育センターによる先行研究をもとに構築

目標構造図の中心に道徳的な価値が位置付けられているように、多文化共生力の態度面は、学習指導要領の道徳教育の目標と深く関連している。(資料4)

多文化共生力（態度面） → 道徳教育の目標 (資料4)

<b>自尊</b> （自分を信じ、愛する）	→ 伝統と文化を尊重する、我が国と郷土を愛する。
<b>他尊</b> （相手を信じ、愛する）	→ 人間尊重の精神を持ち、相手の伝統と文化を尊重する。
<b>協力</b> （みんなの幸せへの責任と努力 → 社会から信じられ、愛される）	→ 公共の精神を尊び、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し、未来を拓く主体性のある日本人を育成する。

児童に対しては、多文化共生力という言葉の代わりに、級訓「パス・イ・コラサーン（平和と心）」を合い言葉として用いることとした。(資料5) このポルトガル語の級訓には、「みんなが仲良く平和で、思いやりや希望などの心を大切にするクラスでありたい」という児童の多文化共生への願いが込められている。ブラジル人児童が提案し、学級の話し合いで決定した級訓であるため、児童にとって愛着もあり、意識化しやすいものである。



資料5 級訓「パス・イ・コラサーン（平和と心）」

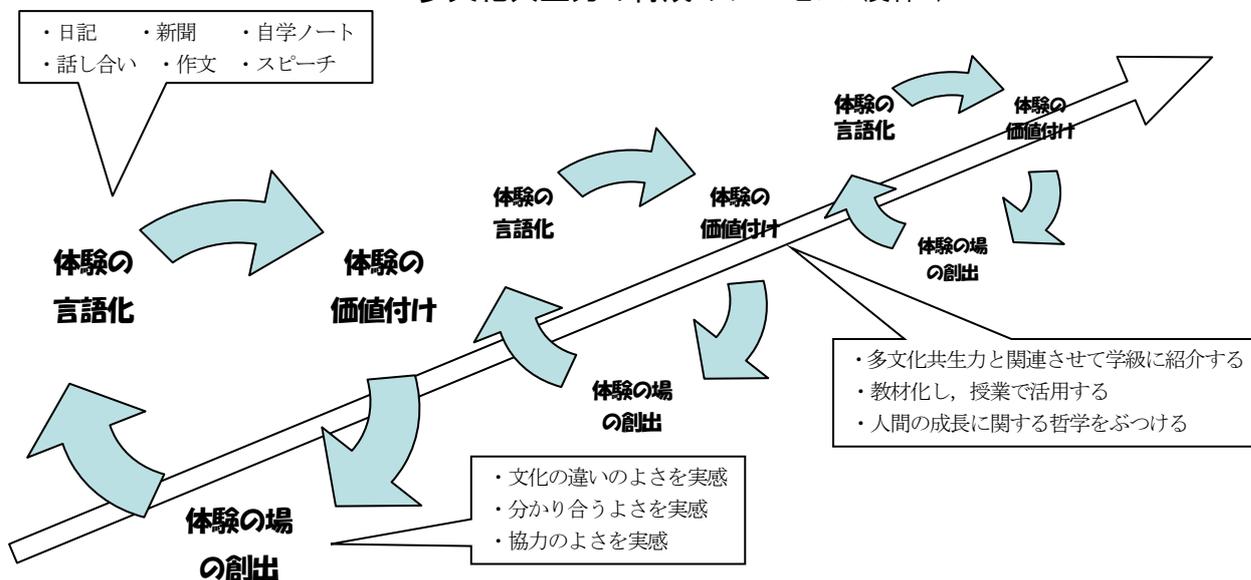
4 研究の手だて

手立て1 **合科的, 関連的, 継続的な体験学習を展開する**

前述のように、多文化共生力は、1時間の学級会など、打ち上げ花火的な単発の学習活動で、容易に身に付くものではない。道徳教育と同様に、日々の学級経営、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動など、ありとあらゆる指導で、合科的、関連的、継続的に行われて初めて、育っていくものである。

本実践では、多文化共生力の育成のプロセス(資料6)を体験学習の3つの段階からとらえる。まず、多文化共生の**体験の場**を作り出す。次に、日記や新聞作りなど、その体験を**言語化**する活動を行う。最後に、児童が言語で表現した体験の中で、育てたい多文化共生力を**価値付け**、強化し、学級全体に広げる。このプロセスをスパイラル的に継続していくことによって、多文化共生力の育成が可能になる。

多文化共生力の育成のプロセス (資料6)





体験の言語化を活性化させる手立てとして、次の2つのものを用いた。

**3-1 日記のテーマを工夫する**

「ベスト3」「友達紹介」「友達のよいところ」「ウソ日記(もしも私が~だったら)」「夢」など。

**3-2 自主的な新聞作りを活性化させる**

自主的な新聞作りを楽しんで取り組めるように奨励する。

**手立て4 多文化共生体験を価値付ける**

言語活動を通して、児童が意識化したものを、学級で共有して、価値付けることで、学級全体に多文化共生力を広げていく。

**4-1 多文化共生力と関連させて学級に紹介する**

多文化共生力と関連した、児童の日記や新聞の内容を学級全体に紹介する。児童の多文化共生力を、学級掲示、学年通信、学校賞(西保見賞)で取り上げ、その努力やよさを認める。

**4-2 教材化し、授業で活用する**

日記や自学ノートなどを通して、児童が言語化した多文化共生体験を教材化し、授業を行う。

- ・ 学級活動： 類推ゲーム
- ・ 道徳：「信用される人」
- ・ 総合：「ブラジルの学校生活」

**4-3 人間の成長に関する哲学をぶつける**

学習指導要領で述べられた「人間としての調和のとれた育成」のためには、多様性(多様なものの見方や考え方、感情や情緒、行動パターン、価値観)は不可欠である。人間は本来、調和のとれていない不完全な存在である。だからこそ、お互いを必要とする。文化的な違いがあるから、お互いに助け合い、学び合い、ともに成長することができる。バランスのとれた自分に成長することが自分・相手・社会の幸せにつながる。教育相談やあらゆる指導機会において、こうした哲学を、児童の実態に合わせて、一貫して語っていく。

**5 抽出児童**

手だてによる抽出児童(資料7)の変容を中心に、仮説の検証を行う。

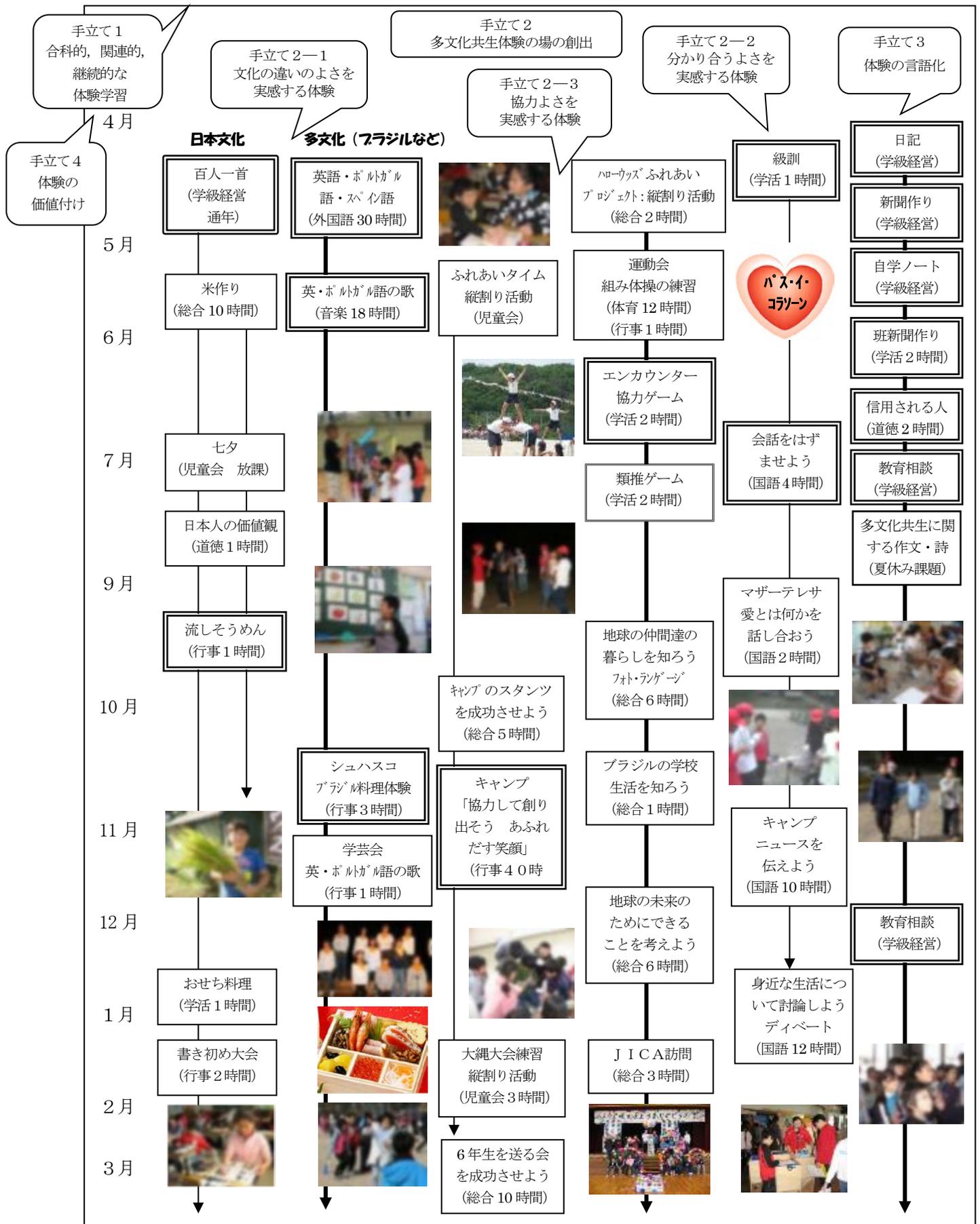
抽出児童A (日本人・男子)	抽出児童B (ブラジル人・男子)
<p>好奇心、問題意識、向上心が高いため、現状をよくするために、人一倍努力をすることができる学級委員。企画・運営力も高く、自己主張も強い方なので、グループ活動で、その場を仕切ってしまう、周りの賛同を得られないことがある。周りから自分がどのように評価されているかということに関して敏感。学級委員として、学習規律を維持するために、ブラジル人に対して細かく注意するために反感を買うことがある。</p> <p>まず、多文化共生に関する、A児の優れた問題意識や感性を学級全体に広げていきたい。また、個性や文化的な違いに対しては寛大に対応できるようにしたい。さらに、文化的な違いを生かしながら、1人ひとりの参加や協力を引き出して成果を上げることができるリーダーシップを育てたい。</p>	<p>日本語での意思疎通や学習には問題はなく、優れた思考力と判断力を持っている。しかし、自分に自信がなく、物事をネガティブに考え、行動できないことが多い。授業中の発言も消極的で、発言時の声も小さい。宿題や提出物を期日までにしたりすることも苦手。毎日の宿題である日記も4月は書いてこないことが多かった。日本人は、外国人である自分を受け入れてくれないかもしれないという不安を常に抱えている。</p> <p>まず、ポルトガル語や英語の能力に優れているので、外国語活動等で活躍の場を設け、自信をはぐくみたい。また、日記や新聞作りで、自分の多文化共生体験をしつかりと振り返り、言葉にできるようにしたい。さらに、日本人とお互いの文化を尊重し、信頼し合える関係を築けるように支援していきたい。</p>

資料7 抽出児童

**6 指導計画**

学科的、関連的な体験的学習によって、年間を通して、継続的に、多文化共生の学級作りを行っていく。そのための指導計画(資料8)を次頁に示す。

指導計画 (資料8) : 行事48, 総合43, 外国語活動30, 音楽18, 国語28, 体育12, 学級活動8, 道徳3



### Ⅲ 実践と考察

#### 1 多文化共生体験の場の創出（手立て2）

##### (1) 文化の違いのよさを実感する体験

###### ① 外国語活動：ポルトガル語・スペイン語

まず、外国語活動に、ポルトガル語やスペイン語表現の練習を取り入れていくことで、日本人児童が外国人児童のよさや活躍にふれることができるようにした。

南米系児童のよさとしては、まず、母語であるポルトガル語やスペイン語で意思疎通を図ることができること。また、同じラテン系の言語である英語の語彙力や発音にも優れている。

また、一般に、ラテン系気質をもつ南米系児童は大きな声や大きなジェスチャーなど表現力が豊かで、間違えを恐れず、意欲的に授業に参加して、コミュニケーションを楽しむことができる。こうしたよさは、学級の中に南米系児童

が1人か2人の場合は、多数派の日本人の雰囲気には押し流されにくいかもしれない。しかし、本校のような南米系児童が多い学級では顕著に表れる。ブラジル人のB児の場合も、外国語活動の授業では他の授業では見せないようなテンションの高さと豊かな表現力を発揮する（資料9・10）。

外国語活動の授業での一幕。「5・4・3・2・1・0！」スペースシャトルの打ち上げのビデオを見ながら、カウントダウンをした。初めは、英語。次に、「ポルトガル語でカウントダウンができる人？」と聞くと、学級の約3分の2の児童が立ち上がった。そして、元気いっぱいに出して、カウントダウンを楽しんだ。他にも、ジェスチャーゲームで、「Como vai?（調子はいかが？）」「quente!（暑い）」など、ポルトガル語で、感情や様子を表す表現を学んだりもした。

こうした外国語活動の体験を通して、日本人児童は、外国人児童のよさや外国語のよさを実感するようになった（資料11・12）。

###### ② 特別活動（行事・学級活動）：ブラジル料理・流しそうめん・百人一首

行事を通して、体験を通じて、文化の違いのよさを実感できるように心がけた。例えば、キャンプでは、典型的なブラジル料理であるシュハスコ（バーベキュー）を体験する場をつくった。ブラジル人児童は率先して肉を焼き、日本人児童にうれしそうにふるまっていた（資料13）。

資料14の感想から、この体験が、日本人児童にとって、異文化のよさを味わい、文化交流を楽しんだ体験であったことがわかる。また、ブラジル人児童は日本人が自文化をポジティブに受け止めてくれたことに喜びを感じている。

日本文化の体験として、本校では、夏休み明けの日に「流



資料9 外国語活動におけるB児の豊かな表現力

総合の時間に「上を向いて歩こう」のポルトガル語バージョンの歌のCDを聞いた後、先生が「何か変えた方がいいところは？」などと聞くとB君（ブラジル人）は、すぐ手をあげていました。いつものじゅぎょうではあまり手をあげたりしているところを見たことがないけれど、英語やポルトガル語などの外国語のじゅぎょうではぜっこうちょうの調子でやっていたので、B君は外国がすきなかなあと感じました。

資料10 M児（日本人）の日記 10/12

外国人の子たちは、(外国語の)発音がじょうずです。はずかしがらずに、歌ったり、おどったりするのもすごいです。

資料11 Q児（日本人）の日記 6/14

ぼくはポルトガル語が好きです。なぜなら、響きがいいし、話せるとみんなと友達になれるからです。いつかブラジルの子と自由に話がしたいです。

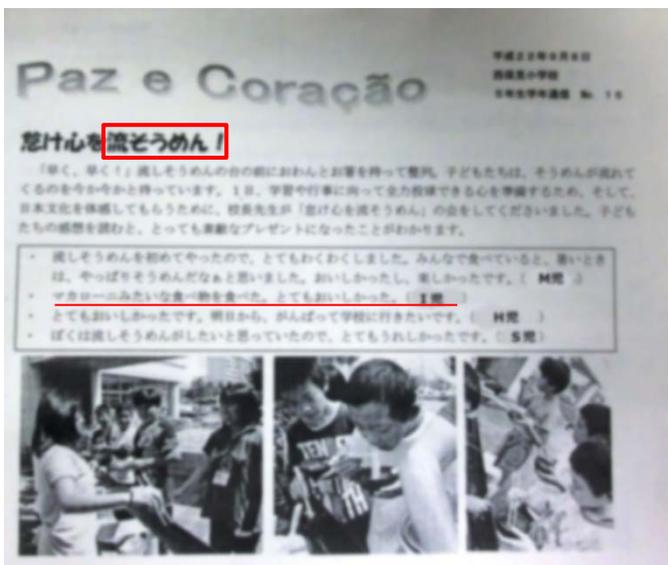
資料12 A児（日本人）の日記 12/13



資料13 ブラジル料理（シュハスコ）体験 10/22

- ・初めて食べたけど、すごい肉じるが出てきたので**すごい**なあ  
Y児（日本人）
- ・**とてもおいしかった**。色々な国の食べ物を食べると**ふしぎな感じで新しい経験**になる。  
R児（日本人）
- ・**とてもおいしい**。いろんなものにも合うので、**家でも1回やってみたい**。  
N児（日本人）
- ・**ブラジル人との交流**ができたし、**ブラジル人が活やくできてよかった**。  
A児（日本人）
- ・みんなでブラジル料理を食べると、**ブラジルの子と話す話題ができるから、いいこと**。  
K児（日本人）
- ・**おたがいの文化を知る機会になってよかった**。E児（日本人）
- ・みんながブラジルのお肉って**おいしいねと言ってくれるので、とってもうれしい**です。  
J児（ブラジル人）

資料 14 ブラジル料理体験の児童感想 10/26



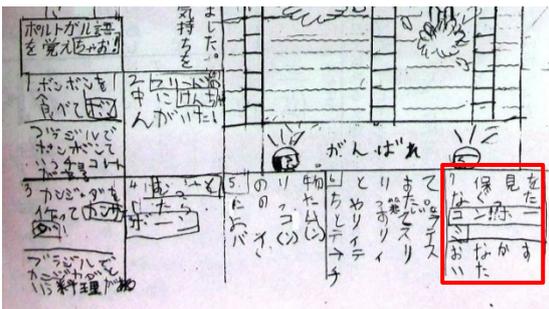
資料 15 「流しそうめん」の児童感想（学年通信） 9/8

(2) 分かり合うよさを実感する体験

① 学級活動： 自作新聞による自文化紹介

南米系児童の瞳は生き生きと輝く。外国語活動で、自分たちの言語を教えているとき、実にうれしそうな表情をする。

自分の母語を友達に覚えてほしいという思いは、自主的な新聞作りの活動にも反映された。ブラジル人のB児とO児、ペルー人のW児の3人はポルトガル語とスペイン語の紹介記事を書いた新聞(資料17)を意欲的に発行した(年間12部)。



資料 18 班新聞のB児のポルトガル語紹介記事 7/13

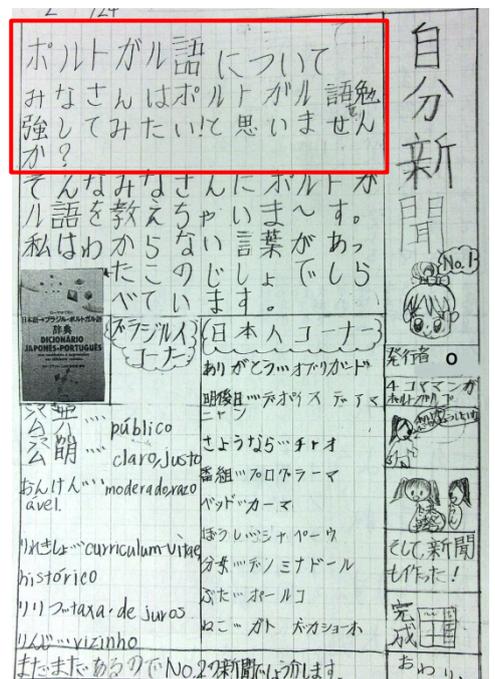
B児は、「保見をなぐった、『コンフォーミ(お腹がへる)』お腹すいた！」

しそうめん」行事を行っている。ブラジル人のI児の感想(資料15)より、日本文化のよさを味わったことがわかる。

また、本学級では、年間を通して、帰りの会を中心に、五色百人一首を行っている。日本人、外国人を問わず、児童はこの日本文化を大いに楽しんでいる。日本人のH児は自作新聞で百人一首の記事を書き、主体的に自文化を学級に広げる行動をとっている。(資料16)



資料 16 H児（日本人）の日本文化の紹介記事 2/5



資料 17 O児（ブラジル人）のポルトガル語紹介記事 11/24

など、語呂合わせを使って、ポルトガル語を楽しく覚えられるように、自ら工夫をして班新聞の中で紹介をした(資料18)。また、W児はスペイン語やポルトガル語を学ぶことで、英語の学習が楽になるという利点まで自作新聞で訴えている(資料19)。

こうした外国人児童の思いに応えるかのように、日本人児童が外国語の学習に興味を示し始めた(資料20)。自文化を説明して、分かってもらおうとする外国人児童の熱意と努力が、日本人児童に伝わり、外国語で分かり合う楽しさにつながったと考えられる。

さらに、外国人児童の外国語紹介の努力に呼応して、日本人児童にも、自作新聞で、日本文化の

紹介記事を書く子が出てきた。(資料21・22・23)

「先生、HさんやKさんの新聞すごいよね。日本について知らないことがわかったよ。」

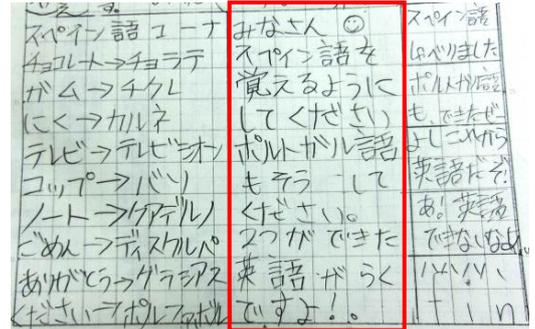
ブラジル人のO児がつぶやいた。

児童がお互いの文化を分かり合うよさを感じていることが伝わってきた瞬間だった。

② 国語科： 「会話をはずませよう」

この單元では、相手の意図を考えながら、会話のキャッチボールをすることを学んだ。具体的な会話スキルとしては、

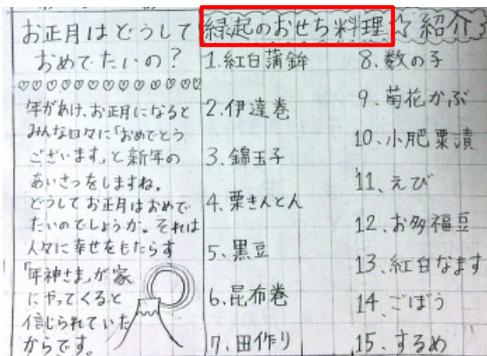
- ・ 相手の心にスロー： 話題にそって質問する。相手が(投げる) 知りたいことを具体的に伝える。
- ・ 相手の心をキャッチ： うなずく。感想を言う。(受け止める)
- ・ キャッチボールのときの声かけ： 豊かな表情。ジェスチャー。



資料19 W児(ペルー人)のスペイン語紹介記事 10/21

ぼくは最近おもしろいと思うことがあります。それは**日本人のA君やF君やPさんなどが、ポルトガル語をおぼえようといっしょうけんめいやっているところがすごい**と思います。そして、**ポルトガル語で話したら会話がはずむのがすごい**と思います。

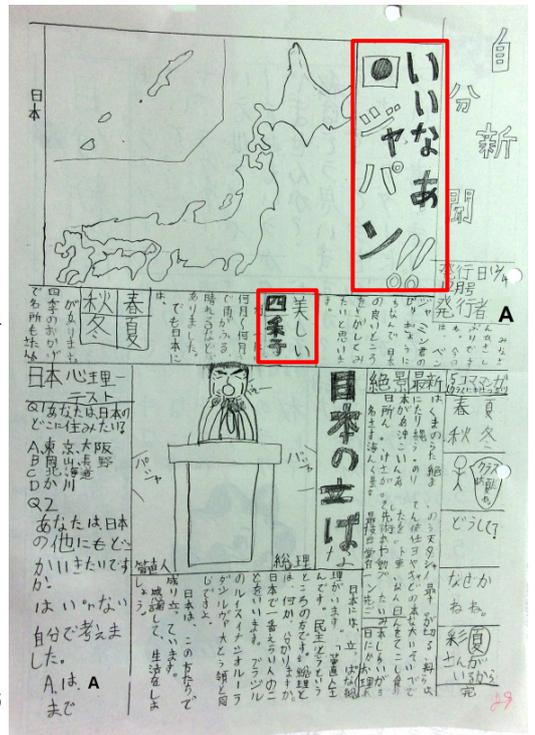
資料20 B児(ブラジル人)の日記 12/14



資料21 H児(日本人)の日本文化紹介記事 12/14



資料22 K児(日本人)の日本文化紹介記事 12/16



資料23 A児(日本人)の日本文化紹介記事 12/9



資料24 班で会話練習をするA児とB児の様子

会話のキャッチボールは、級訓「パス・イ・コラサーン」の中の言葉を使い、**心(コラサーン)のキャッチボール**と位置づけ、多文化共生力との関連付けを図った。

単元の流れとしては、まず、教科書の会話のキャッチボールがうまくいっていない会話例を読んで分析し、問題点、改善点を明確にする。次に、改善点となる会話スキルを使って、ペア練習、班練習(資料24)、振り返り(資料25)を行うというものだった。

「日本人とブラジル人の仲がまた1つ結ばれた。(A児)」、「みんなとの絆を深めたのでよい。(B児)」このような授業感想(資料26)から、1人ひとりが会話スキルを使うことで、話が盛り上がり、分かり合うよさを実感できたことがわかる。

また、A児は給食時の会話が、日本人とブラジル人で分かれて話していることに**問題意識**を持っていた。共通の話題をもち、会話スキルを使うことで、給食の会話をみんなで楽しむことができるという期待を胸にふくらませている。

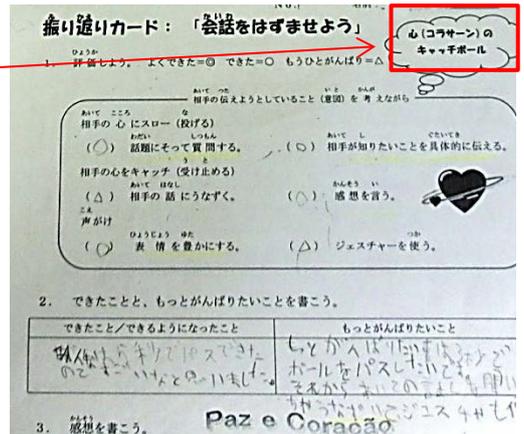
授業後の学級活動で、班の新聞作りを行った。全4班がこの会話スキルの授業を記事として選び、「めっちゃくちゃ盛り上がる」、「楽しい」、「心(の距離)が縮まる」、「絆が深まる」などの感想から、分かり合う体験をポジティブにとらえていることが理解できる(資料27・28)。



資料27 1班(A児とB児を含む)の班新聞 7/13

(3) 協力のよさを実感する体験

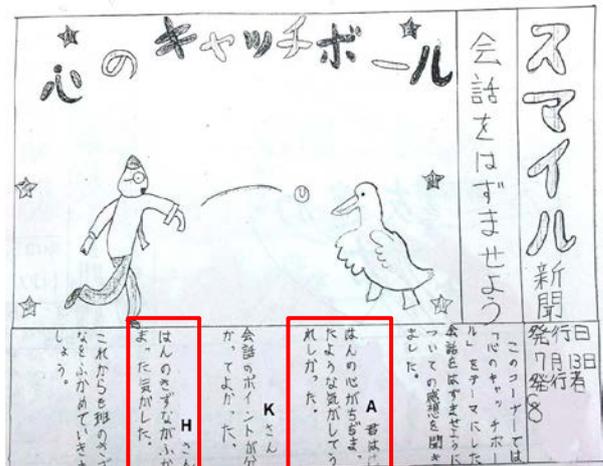
- ① 学級活動: エンカウンター・協力ゲーム  
「言葉の壁があっても、協力はできる。」そして、「協力をすれば、心は通じる。」これは、パースディ・



資料25 B児(ブラジル人)の振り返りカード 7/9

- ・今日はPさん(日本人)のおもしろい話で1班がよく盛り上がりました。B君(ブラジル人)は特に、質問にそってしっかりと分かりやすく答えていてすごい。班で、給食の時は日本人とブラジル人の人とわかれて話してしまうところがあります。でも、この会話で、**たくさんのお話を聞きました**。1班は明るい人がたくさんいます。この授業を通じて、**日本人とブラジル人の仲がまた1つ結ばれた**ような気がします。 A児(日本人)
- ・相手の話にながずくことができました。ぼくは、みんなと仲良くできるように、このじゅぎょうを大切にします。もっとがんばりたいことは、3秒以内で質問に答えたいです。国語は、ぼくにとって、とっても大切にしたい気持ちをもっと大きくなりました。それから、**みんなとのきずながかめたのでいいな**と思います。 B児(ブラジル人)

資料26 班練習に関するA児とB児の授業感想 7/9



資料28 2班の班新聞 7/13

- ・協力は、言葉が不自由でも、誰でもできるからいいことだなと思いました。 F児(日本人)
- ・パースディ・ラインの時、I君(ブラジル人)が困っていました。僕は日本人で、相手はブラジル人で通じるかなと思ったけど、通じたのでよかったです。**日本人も外国人も言葉とかは違うけど、協力をすれば、心は通えるんだな**と感じました。 A児(日本人)

資料29 エンカウンターの授業感想 6/28

ライン（言葉を使わないで、1月～12月までの誕生日順に整列するエンカウンター）を体験した感想である（資料29）。

エンカウンターの3日後、協力ゲーム（資料30：台形パズルのピースを、言葉を使わないで、グループで協力して組み立てる活動）を行った。「協力をすれば、何でも早くできる、簡単、絆が深まる、がんばりたくなる」という授業感想（資料31）から、児童が協力のよさを実感し、協力への意欲が高まったことがわかる。

「これからは、日本語が伝わらない子がいたら、優しく、簡単な日本語やジェスチャーで教えてあげたい。」（資料32）このように、多文化共生のために、具体的にできることを進んで発表できる児童もいた。

協力のよさに関する児童の感想は、資料33のようにまとめて、教室に掲示をした。



資料30 協力ゲームの様子 7/2

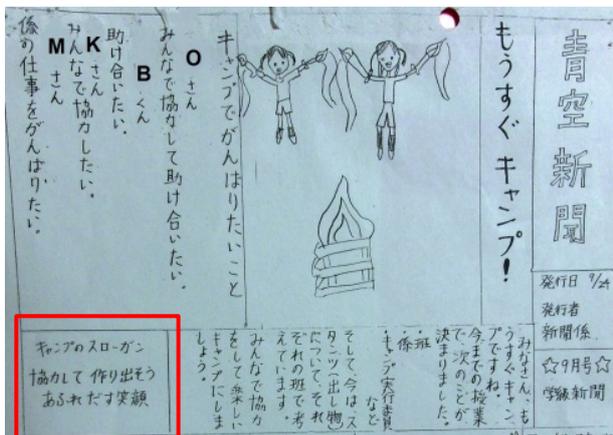
・仲間との**協力はとても大切**なものなんだなと思いました。これからは、**日本語が伝わらない子がいたら、やさしく、簡単な日本語やジェスチャーで教えてあげよう**と思いました。 L児（日本人）

資料32 L児（日本人）の授業感想 7/2



資料33 協力ゲームの学びに関する教室掲示

できるように、準備を進めてきた（資料34）。本番の感想から、協力するという共通の目的をもつ



資料34 協力への思いを伝える記事 9/24

- ・言葉が使えないのは大変だったけど、みんなで協力すれば意外と簡単になってくるように思いました。台形作りが**上手くいったのは、みんなの心が通じ合って、相手のことを考えたから**だと思います。 E児（日本人）
- ・協力できる遊びは、**絆を深める**んだとぼくは感じました。 Y児（日本人）
- ・協力した方が**何でも早くできる**ことがわかりました。これから**いっぱい協力してみたい**です。 L児（日本人）
- ・協力は、**すごい力をもっている**と思いました。これからもみんなでもっと協力したいです。 C児（ブラジル人）
- ・これからも、何でも1人でやらずに、**みんなで協力してがんばって**いきたいです。 K児（日本人）
- ・台形作りでは、最初は、「(難しくて)もういやだ!」と思っていたけど、(日本人の)E君が**一生懸命みんなのためにがんばっていたので、私もがんばるぞ**と頑張ってました。**私もみんなのためにがんばりたい**なあと思いました。 P児（日本人）

資料31 協力ゲームの授業感想 7/2

## ② 行事： キャンプ

「協力して創り出そう。あふれだす笑顔」のスローガンのもと、ファイヤーのスタンツ作りなど、約10時間をかけて、協力のよさを実感

- ・きもだめしは**協力いっぱいあって、きずながふかまった**と思います。理由はみんなで歌ってこわがらないようにしたから。ちょっとこわかったけど、めっちゃおもしろかった。 B児（ブラジル人）
- ・ぼくたちの班はオリエンテーリングで見事1位をとって、いい気分で協力の輪が広がりました。他にも、**たくさんのゲームをやった後は、協力と絆がふかまった実感**があります。 A児（日本人）
- ・キャンプで、仲間との絆が深まったと思います。なぜかという、班にはまだ、いっしょに話したり、あそんだりしていない子がいて、その子たちと**3日間いっしょにかつどうしていたら、いつのまにかなかよくなりました**。みんなともっともっと（きずなを）広げたいです。 W児（ペルー人）
- ・ぼくは**ブラジル人だけど、みんなではなしたり、カレーをつくったり、オリエンテーリングをみつけて、なかよくなって、たのしかった。なかまのきずながふかくなった**。日本人といっしょにキャンプをしたのしんだのでよかったです。 D児（ブラジル人）

資料35 キャンプの感想 10/26

た、共同生活体験が絆を深めてくれることがわかる。

## 2 多文化共生体験の言語化（手立て3）

### （1） 日記のテーマを工夫する

5月中旬、毎日の宿題の1つである日記の中で、外国人児童が多文化共生体験を言語化しやすくするために、「日記テーマのメニュー20」（資料36）提示した。

このメニューのおかげで、何を書いたらよいかかわからず、日記が書けないという児童はいなくなった。特に、意外な効果を発揮したのが「うそ日記」（物や人になりきって書く物語）。ブラジル人のD児は以前、日記を書いてこないことが多かった。書いてきても、「〇〇しました。楽しかったです。」という3行程度のもの。私はその理由を日本語の語彙不足と考えていた。

しかし、日記メニュー20を紹介した後、D児は「うそ日記」（資料37）を書いてきた。その量と質に感動した。まず、書いた量は日記用紙の裏までの14行。表現したいという意欲は日本語力の壁をも打ち破る力をもっていることを痛感した。また、その質に関しても、「いろんなところや国」という表現から、多文化とのかかわりが読み取れる。怒りと悲しみという気持ちについても素直に表現されていた。

「雲の敵の風って、誰？ 先生かな？ くもも君はB君？ くみみちゃんは誰？」 D児の日記を学級で紹介し、その量と質をほめた後、このような質問をしながら、D児の想像（半分は現実）の世界を全員で味わった。

今日は、ぼくがくも（雲）になりました。ぼくは、**いろんなところや国**を見ました。でも、くもにも気持ちがありました。たとえば、ぼくの友だちの**くもも君はおこる**と黒くなって、下からかみなりがでます。もう1人は、**くみみちゃん**です。だれかと、けんかをする**なみだ**がでてきて、下にいる人たちに雨をかけます。でも、くもにもてきがあります。**風**はつよくて、ぼくたちをおいはらいます。

資料37 D児（ブラジル人）の「うそ日記」 5/26

今日、**ぼくはB君（ブラジル人）**になりました。B君の中はぼくなので、ポルトガル語がしゃべれず、日本語がぺらぺらで、変でした。みんなもへんと言っていておもしろかったです。でも、**自分の体はポルトガル語がしゃべれたので自分はすごいと思いました**。このままの体だったらおもしろいと思いました。でも、ねたらもどいてしまいました。起きたら、おかあさんは、F、顔が変だったよといっていました

資料38 F児（日本人）の「うそ日記」 6/22

今日は**Mちゃん（日本人）**になりました。学校に行って、**J（ブラジル人）**と**Lちゃん（日本人）**と遊びました。とても楽しかったです。いろいろなところに行きました。家に帰りました。サンタ（M児の犬）がねたふりをしていました。私はなんにもわかりませんでした。それでサンタは私をかみました。とてもいたかったです。血もでました。私はサンタをけりました。サンタはかいだんからおちて、（私は）元気になりました。私はザマミロと言いました。

資料39 J児（ブラジル人）の「うそ日記」 6/2

- ① 授業日記
  - ・今日の授業で言いたかったこと
  - ・今日の授業でわかったこと
  - ・今日の授業で考えたこと
- ② 今日心に残った〇〇の言った言葉
- ③ 今日、発見したこと
- ④ **うそ日記**
- ⑤ **友達いいところ**・がんばり・成長日記
- ⑥ 私の〇〇紹介（家族・家・宝物など）
- ⑦ 私の失敗日記
- ⑧ 将来の**夢日記**
- ⑨ 家族の話題日記（家族の人と話したこと）
- ⑩ 今日のニュースベスト5
- ⑪ 〇〇を見て、思いつくこと10
- ⑫ 好きな〇〇**ベスト3**
- ⑬ うれしいこと日記
- ⑭ こまった日記
- ⑮ おどろいた日記
- ⑯ 話題のニュース日記
- ⑰ 行事日記（〇〇の練習のできるようになったこと、がんばったことなど）
- ⑱ 学校生活（係・当番・委員会の仕事で心に残ったこと）
- ⑲ 読書日記（本の感想・おすすめの本）
- ⑳ 教科書に出てくる人物への手紙

資料36 日記テーマのメニュー20

さらに、日本人児童がブラジル人児童になる「うそ日記」（資料38）、ブラジル人児童が日本人児童になる「うそ日記」（資料39）もあり、「外国語を話せるよさ」や「一緒に遊ぶ楽しさ」という多文化共生への思いが言語化されていた。

ブラジル人のB児は、好きな教科「ベスト3」というテーマの日記（資料40）で、「日本語を上手になって、日本人の仲間をつくりたいから、国語が好き」という多文化共生への思いを伝えている。そして、日本人のH児は「友達いいところ日記」（資料41）で、B児の思いをしっかりと受け止めている。

ブラジル人のC児は「夢日記」（資料42）で、日本語でのコミュニケーションの不安を正直に伝え、自分の夢の実現のためにも、日本語をがんばって勉強していきたいという思いと決意を表現している。

ぼくの好きなきょうかベスト3は英語です。ぼくがブラジル学校のころから英語が好きだったんです。あしたの4時間目の英語がとても楽しみにしています。

ベスト2は**国語**です。なぜかという、ぼくは**日本語を上手にしゃべって、いろいろな日本の仲間をつくりたい**とおもいます...

資料40 B児（ブラジル人）の「ベスト3日記」 6/8

こうした日記を朝の会、給食後の時間で、学級に多文化共生力と関連させながら、価値付け紹介することで、B児とH児のように、言語化された**心（コラサーン）のキャッチボール**が生まれていった。

今日は**B君のすごいと思うところ**を書きます。

1つは、**B君の日記の好きな科目の国語のしょうかいで、日本のなかまをつくりたいと書いてあったこと**です。2つ目は、算数の授業の時に、たくさん発表したりしていることです。算数以外にもいろんな科目でがんばっています。すごいと思いました。

資料41 H児（日本人）の「友達のいいところ日記」 6/10

大きくなったら歌手になりたい。理由は、私は、いろんな国のうたが好きだからです。前は、モデルになりたかったけど、私は考えました。友達と努力して歌いたいと思っています。

**私は、日本語でちょっとしゃべるけど、ともだちが意味分らないと言って、ごまっしてしまいます。日本語をうまくしゃべるように毎日がんばっていきたい**と思っています。

資料42 C児（ブラジル人）の「夢日記」 6/5

- 自主的な新聞作りを活性化するために**
- ① 手本を十分に示す。 新聞関係の支援
  - ② グループで新聞作りの練習をする。 班新聞作りの支援
  - ③ 宿題（自主学習）として認める。
  - ④ 必ず、コピーして全員に配布する。
  - ⑤ 号数を数える。 自主的な新聞作り
  - ⑥ 目標（目指せ、年間100号）達成度につれる。
  - ⑦ 育てたい力と関連する記事を紹介し、賞賛し、価値付ける。
  - ⑧ 新聞の掲示をし、蓄積していく。
  - ⑨ グループの新聞作りの楽しさを広げる。

資料43 自作の新聞作りを活性化するために

**(2) 自主的な新聞作りを活性化する**

こうした日記に加えて、児童が自主的に発行した新聞が、多文化共生に関する日々の思いや体験を言語化する上で果たした役割は大きい。

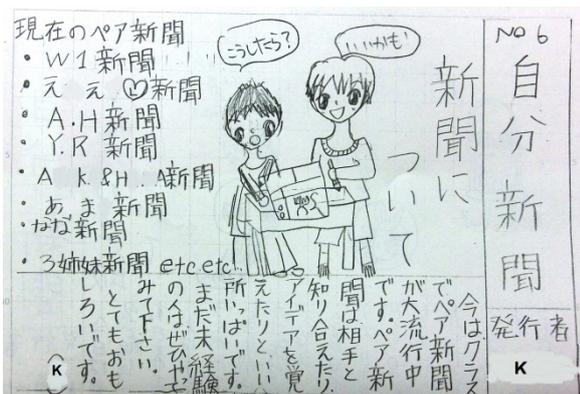
自主的な新聞作りを活性化するためには、主に、資料43の手立てを用いた。まず、新聞係を結成し、支援し、自作新聞の手本となるような新聞を発行できるように指導する。手本の新聞に十分ふ

れたら、次に、班による新聞作りを楽しむ。(資料44) このように、新聞作りに関しては、国語科の授業に加えて、十分に支援をしてきた。そして、新聞作りの楽しさが実感できると、児童は自主的に新聞作りをし始めるようになった。

児童は自作新聞の中で、新聞作りのポイントを紹介したり(資料47)、ペアやグループでの新聞作りのブームを記事にしたり(資料45)、その楽しさを4コマ漫画(資料46)などで発信したりするようになった。



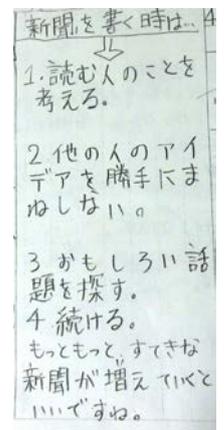
資料44 班新聞作りを楽しむ様子 7/8



資料45 K児（日本人）の記事 11/18



資料46 K児の新聞の4コマ漫画 11月



資料47

Q児（日本人）の記事：新聞作りのポイント 10/4



資料 48 ペア新聞作成中のA児とB児 12/3

「クラスの新聞を一緒に作ろう。」9月の初め、日本人のA児が、ブラジル人のB児に声をかけた。B児は、実にうれしそうな表情で、私にその計画を知らせてきた。国語科「会話を広げよう」や協力ゲームなどが終わった夏休み前から、B児は放課後、日本人児童とも遊ぶようになった。でも、新聞という作品を一緒に作ることは、遊び相手としてだけではなく、仕事のパートナーとしても認められたという意味をもっている。だから、うれしいとB児は話していた。

新聞作りは、記事の内容や取材方法に関する話し合いを、A児がリードする形で進められた(資料48)。B児は4コマ漫画でポルトガル語の紹介記事を書き、自文化のよさを生かしていた。ペア新聞の名前は「W1(ダブル・ワン)新聞」、12月には2号(資料49)も発行し、2人の協働作業は続いた。



資料 49 W1新聞(A児とB児のペア新聞)2号 12/3

児童による自作新聞 総発行号数 125号		
(1) 教師の主導の新聞(班新聞):	4号	
(2) <b>自主的な新聞:</b>	<b>121号</b>	
① 個人による新聞:	67号	(55%)
・日本人:	35号	
・外国人:	<b>32号</b>	
② <b>グループ(ペアを含む)新聞:</b>	<b>54号</b>	(45%)
・ <b>日本人と外国人:</b>	<b>20号</b>	(37%)
- 新聞係:	7号	
- 係以外:	13号	
・ <b>日本人だけ:</b>	<b>17号</b>	(31%)
・ <b>外国人だけ:</b>	<b>7号</b>	(13%)
・兄弟姉妹:	10号	(19%)

資料 50 自作新聞発行号数の内訳 平成22年度

本学級のクラス新聞は年間目標であった100号を越えて、3月末には125号まで発行された。資料50から、この言語活動に対する、外国人児童の参加率は、個人とグループ両方とも、全体の約50%と高く、外国人児童も意欲的に新聞作りに取り組んでいるのがわかる。

また、日本人と外国人のグループによる新聞作りは、グループ新聞全体の約40%だった。日本人だけ(31%)、外国人だけ(13%)のグループよりも大きく、この言語活動が多文化間で活発に行われたといえる。

### 3 多文化共生体験の価値付け(手立て4)

#### (1) 多文化共生力と関連させて学級に紹介する

##### ① 相手に関心をもつ

「雲も、人のようにいろいろな性格があることがおもしろい。そして、いろいろな性格の雲に会いたい。」

雲にはそれぞれ性格があるんだろう。空を見ていると、みんなちがう方向やちがったスピードで動いているように見えるから。人にも人それぞれの性格があるけど、雲も人のように、じっと見ていると性格が見えてきて、とてもおもしろい。ぼくはこれから雲を毎日見て、いろんな性格の雲に会いたい。

資料 51 E児(日本人)の日記 5/25

風をみると、さむけがします。きれいな花も木の下に入りたいたいよって見たい。私にかわいそうとおもいます。でも、私うれしい。だって、その風は1人1人とつながっている。

資料 52 C児(ブラジル人)の日記 6/8

E児の言葉(資料51)には、色々な性格をもつ人間、つまり、人間の多様性に対する関心が伝わってくる。学級でこの日記を紹介し、いろいろな性格の人に関心をもつことが「パス・イ・コラサーン」(多文化共生力)を育てていくときのスタートラインであることを確認した。また、朝の会で、C児の2つの日記(資料52・53)を紹介した。そして、C児のいう「風」とは何かをC児に尋ねた。「寒さを運ぶ風は、温かい心もあって、人と人をつなげている。それは、学校、先生、友達!」このような答えが返ってきた。その後、C児の言葉に私が感じた、人と人のつながりへの関心と愛情を学級で分かち合った。

② 相手のよさを認め合う

6月初め、B児は自分から、「日本人の仲間紹介」という日記テーマに取り組み、3回の日記に分けて、日本の仲間のよさを書いてきた(資料54)。このことを、「相手のよさを認める」という「パス・イ・コラサーン」の心として価値付け、学級で紹介した。この時を境に、新聞や日記で、B児やその他の友達のよさを紹介する内容(資料55)が多くみられるようになった。

友達はやさしいけど、おこるところやけんかするところもある。私は、ときどきないたり、わらったりする。でも今の私は幸せでわらっている。**友達は、私のいっしょうのだからものです。みんな大好きです。私は、いろんな国の子どもたちにつたえたいです。日本も私のいっしょうのだから物です。**

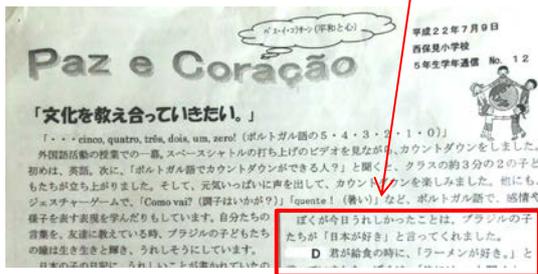
資料53 C児(ブラジル人)の日記 6/11

今日、ぼくの**日本人の仲間をしょうかい**をしたいと思います。仲間1人目、A君です。ぼくはA君とあまりはなしませんA君がおもしろい人だと思います。もう1人はR君。その理由は、ぼくが山東先生のクラスにいるときにR君がぼくのサポートをしてくれるって言ったからです。ぼくは、あんしんしてクラスでべんきょうするようになりました。もう1人はS君。ぼくが4年生にはいってばかりの仲間です。それにしても日本人の仲間はまだまだあります。べつの日記で、その仲間をしょうかいします。これからも**気持ちをこめて、いろんな日記を書きます。**

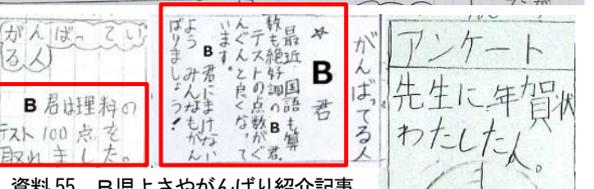
資料54 B児(ブラジル人)の「友達紹介日記」 6/1

ぼくが今日うれしかったことは、**ブラジル人の子たちが「日本が好き。」と言ってくれました。**D君(ブラジル人)が給食のときに、「ラーメンが好き。」と言っていました。ぼくは「他には。」と聞くと、少し考えて、「ごはん。」と言ってくれました。ぼくはすごくうれしかったです。あと、「日本も好き。」と言ってくれました。**すごくよりがちまった感じがしました。これからも、たくさんの日本の文化、ブラジルの文化を教えあっていきたいです。**

資料56 A児(日本人)の日記 7/5



資料57 文化の相互尊重の大切さ(学年通信) 7/9

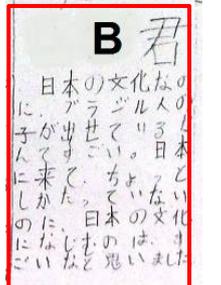


資料55 B児よさやがんばり紹介記事

また、日本人のA児が、ブラジル人のD児から、日本文化である「ご飯」や日本が好きと言われたときの喜びを「(日本とブラジル、お互いの)距離が縮まったような気がした。」と日記で表現してきた。このことを学年通信「パス・イ・コラサーン」(資料57)で取り上げて、「相手の文化を尊重する大切さ」と「相手に尊重される喜び」を強調した。

③ お互いのよさを生かし合う

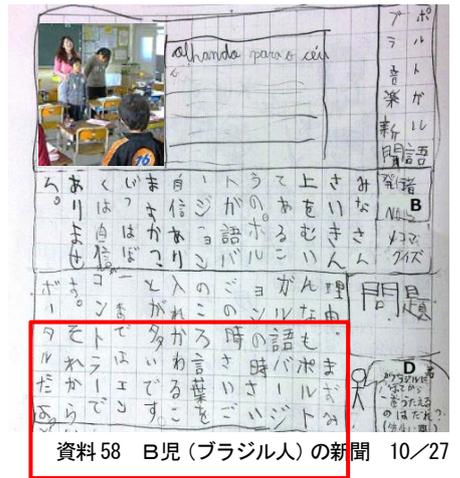
ブラジル人児童のよさを生かすために、学芸会ではポルトガル語の歌を歌うことにした。ポルトガル語を教えるのを手伝ってほしいという教師の呼びかけに、B児は自ら進んで応えた。B児は、歌詞の覚え方を学級に伝えるために、新聞(資料58)を書いてき



た。「自分の文化を積極的に伝えて、みんなに理解してもらおうという主体性」を発揮したB児を学級全体でほめた。B児は照れくさそうな笑顔で応えた。

また、自作新聞で、自文化の背景やよさを生かして、ブラジルやペルーの児童がポルトガル語やスペイン語を紹介したり(資料59)、日本人児童が日本文化を紹介したりする記事を意識的に取り上げて、児童の努力を賞賛した。また、世界の文化に関心をもって、それを紹介する記事(資料60~62)を書いた児童についても、「相手に関心をもつ」という観点の多文化共生力を褒めた。

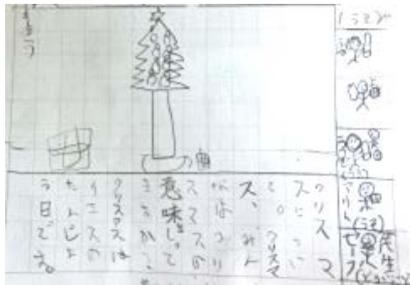
さらに、年間125号の自作新聞の中で、約4分の1の29号(資料63)もの新聞が自主的な「文化紹介」の記事に当てられた。「すごいでしょ。」この偉業に対する私の感動を児童に伝えると、後期の学級委員F児が誇らしげに答えた。



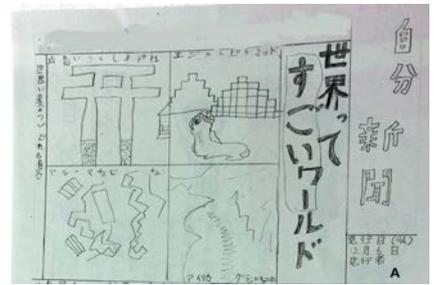
資料58 B児(ブラジル人)の新聞 10/27



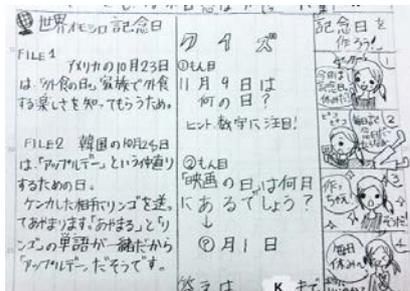
資料59 外国語紹介記事 12/2



資料60 世界文化紹介記事 12/5



資料62 世界文化紹介記事 12/6



資料61 世界文化紹介記事 11/2

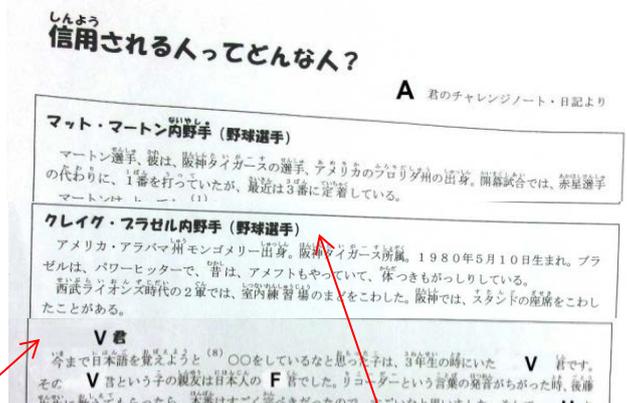
文化紹介関連記事：	29部
全体の4分の1！	
(1) ポルトガル・スペイン語：	12号
(2) 世界文化：	10部
(3) 日本文化：	7部

資料63 文化紹介関連記事の教

## (2) 教材化し、授業で活用する

児童の多文化共生体験を価値付けるために、児童の自学ノートや日記に言語化された体験を教材化し、授業で活用した。例えば、A児の日記(資料65)と自学ノート(資料66)の内容を使って、道徳「信用される人」という授業の教材(資料64)を作成した。

授業の流れは、まず、A児が紹介してきた3人の信用する外国人の資質を題材にして自らの体験を振り返る。次に、自分は学級の中の誰をどうして



資料64 児童の日記を教材化したワークシート 7/12

**V君**  
今まで、日本語を覚えようと**努力**をしているかなと思った子は3年生のときにいた、V君(ブラジル人)です。ポルトガル語も話していたけど学芸会の練習のとき、リコーダーという言葉の発音がちがったとき、後とう先生に教えてもらったら、本番は、すごく完ぺきだったので、すごいなと思いました。そして、(日本人の)Hさん、Qさんと転校してきたら、まっ先に名前を呼んでいたのがV君でした... V君はクラス一の**努力**家だと思いました。ぼくは、もっとV君といっしょに、いたかったと思いました。

資料65 A児(日本人)の日記 6/29

野球選手の紹介。(マートン、クレイグ、アラセル内野手)  
アメリカアラバマ州モンゴメリー出身。阪神タイガース所属。1980年5月10日生まれ。パワーヒッターで、背は、アメフトもやっていて、深つきもがっしりしている。西武ライオンズ時代の2軍では、室内練習場のまよをこわした。阪神では、スタンドの座席をこわしたことがある。  
V君  
今まで日本語を覚えようと(8)〇〇をしているなど思っ(9)た字は、3年生の時にいた V 君です。その V 君という子の親友は日本人の F 君でした。リコーダーという言葉の発音がちがった時、後とう先生に教えてもらったら、本番はすごく完ぺきだったので、すごいなと思いました。

資料66 A児の自学ノート 7/1

- ・B君（ブラジル人）。とても話しやすく**正直**だから。反省の時、みんな100点にしていたけど、B君は92点にしていた。他に、I君（ブラジル人）は、今日ぼくにぶつかったら、「ごめん。」とすぐに言ってくれたので信用している。D君やG君（ブラジル人）は「日本語で！」と注意すると素直に「はい。」と言うので信用している。 A児（日本人）
- ・A君。毎日ぼくに話をかけるし、ぼくが**こまっているときにいつも手伝ってくれる**し、班のだれかがこまっているといつも手伝うのでとてもいい人だと思う。 B児（ブラジル人）
- ・B君とI君とD君（全員ブラジル人）。3人は日本語教室で**努力**をして続けているので。 N児（日本人）
- ・A君。どの人も仲良くできたり、積極的にいろいろなことに**挑戦**している。みんなを笑わせてくれたりするので**明るい**人。今日、マートン選手、ブラゼル選手、V君（ブラジル人）の3人の**共通点は努力家。A君も努力家**だと思う。 H児（日本人）

資料 67 「学級で信用する人」児童の意見 7/12

な価値に気づいてほしいというものだった。

「学級で誰を信用するか？」 資料 67 が児童の意見だ。「正直なB児を信用している。」とA児が答えた。B児は「困っているときにいつも手伝ってくれるA児を信用している。」と発表。また、日本人のN児は、日本語の勉強に努力をして取り組んでいる3人のブラジル人を信用していると言った。さらに、日本人の女子H児が、努力家で、何でも積極的に挑戦し、明るく、努力家の男子A児を信用すると発言した。

ここで、**努力**が共通の道徳的な価値であることを確認できた。また、明るく前向きな姿勢や「人のために」がんばれることが多文化共生のための大切な資質として同意された（資料 68）。

この他に、児童の日記、自学ノート、新聞から教材化した主なものとしては、A児の体験をもとにした学級活動「類推ゲーム」（20の単語の共通点を考え、5つに分類し、小見出しをつけるグループワーク）と、ブラジル人のJ児の体験（資料 69）に基づいた総合的な学習の「ブラジルの学校生活を知ろう」であった。

### （3）人間の成長に関する哲学をぶつける

「こまった日記」。5月、日記メニューを紹介した後、ブラジル人のB児は、「こまった日記」を6回も書いてきた。「算数がわからないのはクラスでぼくだけ。」「気持ち悪くなるから、走りたくない。」「字をうまく書けないし、書くのに時間がかかるから、宿題がイヤ。」「練習しても覚えられない。」「苦手な給

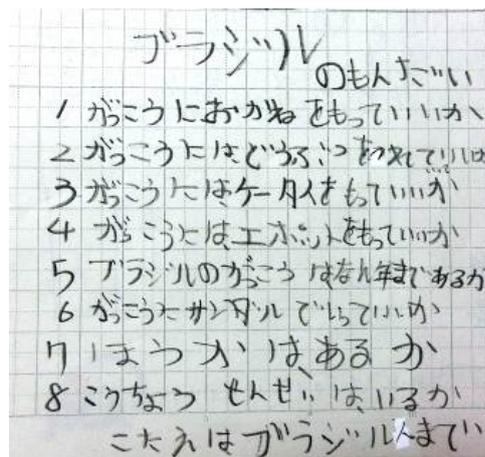
信用するかを話し合う。最後に、多文化状況で、信頼される人の資質を明確にするというものだ。

今回、自分の体験をもとにして組み立てられた授業ということで、A児の意欲は非常に高かった。自分の発言だけでなく、友達の話もすべて聞き取ろうという姿勢が感じられた。また、他の児童も、教材の中のV君（4年生のときにブラジルに帰国したブラジル人児童）のことを信用できる人として覚えていた。そのために、学級全員の児童が意欲的に話し合いに参加していた。

この道徳の授業のねらいは、多文化共生状況で、言語などの違いという壁も感じながらも、日々学校生活を送っている児童に、人間尊重の心、努力、誠実さなど、文化の違いを越えた、人類共通の道徳的

- ・この授業で、ぼくは学校の**みんなが信用できる人だ**ってわかった。理由は、黒板に教室全員の名前が出たから。ぼくはこの教室のみんなと仲良くできるようになる。 B児
- ・日本人だから、信用するとかではなくて、ぼくは**正直で、素直な人を信用する**ことがわかった。B君から信用されていることがわかって、とてもうれしかった。 A児
- ・ふつうは、日本人は日本人のことをかくけど、A君はちがう。B君のことをかいていていいなあ。日本人はブラジル人のことをもっともっとしてほしい。私も**もっともっと日本人となかよくなって日本人のいろいろなことをしりたい**。だから日本人**いろいろなことをしたい**。 J児（ブラジル人）
- ・**ブラジルの子が日本の子を、日本の子がブラジルの子を信用していることがわかって、みんなお互いのよさを分かち合っている**なあ。 K児（日本人）
- ・信用される人というのは、だいたい**明るくて、前向き**な人が多いなあ。よく出てきたHさんやA君は**いつも前向き**なせいではがんばっているので信用されるのかなあ。 E児（日本人）
- ・みんなが信用する人というのは、**やさしかったり、裏切らない、うそをつかない、相談のってくれる**という人。まとめると、**「人のために」がんばる人**。 H児（日本人）

資料 68 「信用される人」の授業感想 7/12



資料 69 J児（ブラジル人）の新聞記事 9/30

食のことを考えると心配。」「日本人はぼくを避けている。」「誰かに、悪口を言われている気がする。」ネガティブな発言のオンパレードがB児の日記だった。

B児は、理屈を重視し、論理的な説明を求める傾向がある児童だ。そこで、B児の自信のなさからくる不安な気持ちを受け止め、信頼関係を築きながらも、「人間の成長に関する哲学」(資料70)をB児に、粘り強くぶつけていくことにした。時には、日記のコメントで、時には、個別面談で、時には、学級への全体の指導で、この哲学を執拗に語ってきた。

## 人間の成長に関する哲学

資料70

### 人生の目的とは...

調和のとれていない自分が、多様な人とかわかり、助け合い、学び合うことを通して、調和のとれた自分に成長すること。

#### ① 人間は不完全だからよい!

もしも、自分がパーフェクトな人間だったら、助けてもらう必要はある? 人と一緒に生きていく必要はある? これ以上、成長する必要はある? 人はパーフェクトじゃないから、人に助けてもらうことができる。人と一緒に生きていく必要がある。そして、人と一緒に成長できる喜びがある。

#### ② 人間は多様だからよい!

人と違いが全くなく、同じ人間だったら、助け合うことができる? 学ぶことができる? 1人ひとりとは多様でそれぞれにはない力をもっている。その力を生かし合えば、みんなの人間的な成長(人生の目的)につながる!

#### ③ 努力をすれば、うまくいくと信じて、ポジティブにいこう!

人を変えようとするより、まず、自分を変える努力をしよう。自分が変われば、周りの人も変わる。がんばっている人を見ると、自分もがんばりたくなる。自分のよさ、自分の努力、自分の可能性を信じて努力しよう! 自分を信じて! 相手を信じて! つらいことが起きたって、みんなそれが成長につながるって信じて!

今日、社会の時間、**学習相たん**がありました。ぼくの出番が来て自分の学校生活をもっとよくすると思いました。

そして、それは本当でした。わるい事が1つ、いいことが3つあると、**いい事を見たほうがいい**と思いました。例えば、がんばってもできない家でいかと体育があるけど、ぼくが**得意になった理科と国語に注目するとできない事なんか、かんたんにぶっとできる**ようになる。

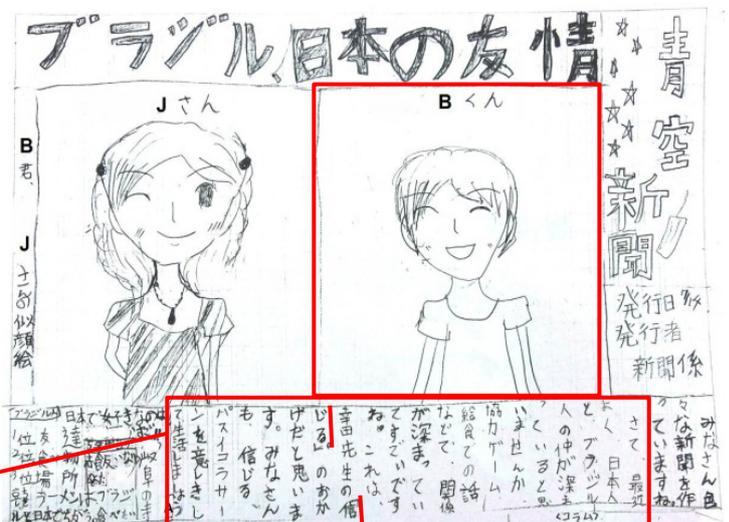
**いつもプラス的に動けば、生活もプラスになるが、ネガティブの方を見ていると、生活もマイナスになる。**そして**人間は完璧じゃないから、プラスとネガティブがあると**思います。これからも**プラス的に生きたい**です。そして、**いくつらかったって、がんばって心のいい高学年になりたいです!!**

資料71 B児(ブラジル人)の日記 12/17

B児の考え方の成長に関して、確実な手ごたえを感じたのが、12月のB児の日記(資料71)を読んだ時だ。「人間は完璧じゃないから、これからはプラス(ポジティブ)にいこう」というB児の言葉に頼もしさを覚えた。

さて、最近よく、日本人とブラジル人の仲が深まっていると思いませんか。協力ゲーム、給食での話などで、関係が深まっていてすごいですね。これは、幸田先生の「**信じる**」のおかげだと思います。みなさんも「信じる」、パス・イ・コラサーンを意識して生活しましょう。

こうした個別の声かけにも呼応して、B児の変化は、6月初めに表れた。資料54の「日本人の仲間紹介日記」だ。このときから、B児が主体的にポジティブな態度をとるようになっていった。不思議なことに学級全体の多文化共生の雰囲気もこのときから上り調子になった。



資料72 新聞系の「信じる」に関する記事 7/14

日本人のA児が新聞系のリーダーとして手掛けた「青空新聞」(資料72)を初めとして、A児が発行した新聞には、人の成長を「信じる」という成長哲学のキーワードが使われている。A児がその大切さを強く意識するようになったことがわかる。

#### IV まとめ

##### 1 成果

本実践を通して、夏休み前から、日本人と外国人と一緒に遊ぶ機会が増えた。A児とB児、K児とO児など、日本人と外国人の人間関係に深まりがみられ、「日本人と外国人の仲がよい学級」という発言も増えた。

##### (1) 自信をもって主体的に行動する

- 外国語活動や音楽で、外国人児童が積極的に自分のよさ(積極性、大きな声、笑顔、ジェスチャー、発音のよさなどの外国語力)を生かすようになった。
- 初タイプ思考の強かったB児は、積極的に、友達によさやがんばりを日記で紹介したり、ポルトガル語の歌の指導にかかわったりした。
- A児は、授業実践後、常に、その学びや成果(絆の深まりなど)を新聞や日記にまとめて主体的に発信した。学級がその成長を確認し、さらなる成長への意欲が高まるような行動がとれた。
- 主体的にクラス新聞を発行し(自主的な発行は121号)、外国人児童がポルトガル語やスペイン語を紹介したり(12部)、日本人児童が日本文化を紹介したりする記事(7部)が多く見られ、進んで文化を紹介し合うことができた。自主的に「文化紹介」が書かれた記事は全体の4分の1を占めた。

##### (2) 文化の違いを尊重する

- 外国語活動や音楽で、ブラジル人児童の活躍にふれることを通して、ブラジル人児童に対する日本人児童の尊敬の念が高まっていった。
- 日記やクラス新聞で、日本人児童とブラジル人児童がお互いに褒めあう内容が増えていった。
- ブラジル人児童同士がポルトガル語で話すことが少なくなり、ポルトガル語を使ったときは、お互いに「日本語で!」と注意し合う気配りが見られるようになった。
- ポルトガル語に関心を持ち、進んで楽しく学ぶようになった日本人児童が増えた。(5名)

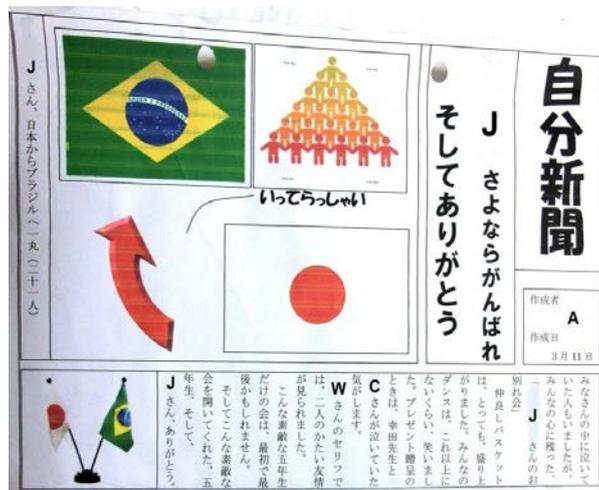
##### (3) 文化の違いを生かして協力し合う

- 外国人児童が、外国語活動をリードしたり、主体的にダンスの出し物を企画し、ブラジルへ帰国するJ児のお別れ会を盛り上げたり、自分のよさを生かして協力することができた。その結果、日本人児童の外国人児童への信頼も深まった。(資料73)
- キャンプファイヤーのスタツや国語「ニュースを伝え合おう」の班発表では、日本人のA児が、ブラジル人児童のよさを生かした、配役やせりふを考え、発表を成功に導くことができた。
- 学級活動「類推ゲーム」では、A児がブラジル人のB児に、「この言葉はポルトガル語で何て言うの?」と尋ね、外国語が得意な相手のよさを生かす行動を示した。
- 日本人と外国人のグループでクラス新聞を作ることがよく見られるようになった。(全体の40%)

##### 2 課題

実践を振り返り、以下のような課題が浮かび上がってきた。今後の実践に生かしたい。

- 多文化共生力の系統的に育てていくためには、学年別の年間指導計画を作成し、学校全体を挙げての実践に取り組んでいくようにしたい。これにより、学年間でのスパイラル(反復)学習も可能になり、



資料73 お別れ会に関するA児の新聞記事 3/11

多文化共生力の定着につながる。

- 日系移民の歴史や活躍に関する学習が十分にされていない。ブラジル人やペルー人児童が自文化への誇りをはぐくむ指導を6学年で充実させたい。
- ポルトガル語や歌や料理など、表面的な文化に関する理解は深まった。今後は、日本と南米の文化的な「常識」や価値観（時間や約束に関する意識など）の違いなど、文化の深い部分に焦点を当てていきたい。文化間の相互イメージを考えたり、誤解の事例を取り上げたりして、異文化理解を深めていきたい。
- A児のような能力の高いリーダーのおかげで、グループの協力が引き出されているケースが多かった。1人ひとりのコミュニケーション力や協働力の向上を努めていきたい。

## V 実践を終えて

これまでの自分の人生において、最も感動的で最高のスピーチだった。(資料 74) ブラジル人のB児は、200人の全校児童を前に、台本を全く見ずに、心を語った。自信に満ちあふれる表情で、多文化共生への熱い思いを届けた。大きく成長して、たくましくなった姿を見せてくれた。

「ぼくは小さいころから、外国人と一緒に生活してきた。なので、外国人が全くいない学校で生活したら、心細くなると思う。」日本人のA児の言葉。当初、日本人と外国人、お互いが信用できなかつた、子どもたちは誰もが共生への温かい願いをもっていた。

「先生、いつもぼくは自信ないけど、いつもきぼうをあたえてありがとう。」学級じまいで、子どもたちからの寄せ書きプレゼント。そこに書かれていたB児のメッセージだ。思わず、胸が熱くなった。

外国人児童の比率が全校児童の6割を超える理想の多文化共生環境で、小学校時代を生活してきた、A児やB児、そして、本学級の子どもたち。「パス・イ・コラサーン（平和と心）」の多文化共生社会を築く上で、この子どもたちこそ、私にとっての「希望」なのだ。今後も、多文化共生に関する国際理解教育を自分のライフワークとして、子どもたちとともに共生社会の「希望」をはぐくんでいきたい。

## VI 参考文献

文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』2008年

JICA中部国際センター『教室から地球へー開発教育・国際理解教育 虎の巻 ～人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ～』東信堂、2006年 P16～19

静岡市教育センター『研究紀要第1号 参加型学習、地域資源の活用による国際理解教育』2005年

川崎市総合教育センター『研究紀要第15号 多文化共生の社会を目指した国際理解教育』2001年 P41

### 不安から自信へ

ぼくは3年生のころ、ブラジル人学校から西保見小学校へ来ました。西保見小学校に入る前は不安な気持ちでいっぱいでした。なぜかという、外国人のぼくは、きつといじめられるだろうと思っていたからです。日本人がこわかったのです。

西保見小学校では、初めは、ことばの教室で勉強をしたので、日本人が一人もいませんでした。安心しました。その後、4年生の教室に行くことになりました。教室を見ると、日本人がいっぱい。「ああ、もうだめだ。」でも、いじめられません。おどろいたことに、日本人からもらったのは、「いじめ」ではなくて、その反対の**希望**でした。ぼくが気づいたことは、「**日本人は信用できる**」ということでした。それから、不安な気持ちは消えて、日本人と遊ぶことができるようになりました。西保見小学校で本当によかったと思いました。

5年生になって、その**希望**はもっと強くなりました。日本人の中で、**ぼくが信用しているA君は、ある日ぼくにこう言いました。「クラスの新聞をいっしょに作ろう。」** **ぼくはA君をもっと信用するようになりました。**初めての新聞が完成。その後も、ぼくたちはいっしょに新聞を作り続けました。**A君への信用は倍**になりました。そして、キャンプ。みんなとの絆がもっと深まりました。みんなと**協力**して、いろいろなことができたからです。ぼくが外国人なのに仲間ができました。

でも、いいことばかりではありませんでした。悪いことが台風のように強力にきました。だれかがぼくの名札にいたずらをしたのです。そのとき、こう思いました。たぶん、ブラジル人ではなくて、日本人がやったにちがいない。ぼくは、裏切られたような気持ちになりました。「せつかく日本人と仲良くできたのに、くやしい。」

ぼくは、お母さんに相談しました。「やった人のことなんか、気にしないで。Bは日本人と仲良くできたんだから。」お母さんはこの言葉でぼくをはげましてくれました。それから、ぼくは**心を切りかえて、自信をもって行動する**ようにしました。すると、日本人と友情が深まり、楽しく学校で生活ができました。

そして、なぜ、ぼくに名札のいたずらが起きたのか、やっと気づきました。**何があっても自分に自信をもって生活すること、ぼくがこのことに気づくために、名札事件が起きたのだ**と思っています。

**自信をもって生活していると、ちがう学年の仲間もできました。今はつらいことを忘れて、今年のいいことだけが頭の中にかかっています。**

資料 74 修了式におけるB児の代表スピーチ 3/22